

一平のロシア便り

第2回 ロシアに至る道

前回はロシアの今、モスクワの今について取り上げましたが、今回は私がなぜロシアとかわりを持つことになったのかをつづってみようと思います。

1991年8月 最初の出会い

私がロシア(ロシア語)というものを強く意識することになった最初のきっかけは、今をさかのぼること24年前の1991年8月のことでした。当時の私は浦和市の市立中学校に通うごく普通の中学3年生。8月といえば夏休み期間ですので、自宅で朝からテレビを見ていた際に何かのニュース速報の字幕が流れました。しかしニュースに気付いた時は字幕の途中からだったため、内容のすべてを見ることができずに何のニュースであるかが分かりませんでした。通常速報のテロップは2回繰り返して流れるものですが、その際は2回目の途中であったようで繰り返して流されることがありませんでした。「何のニュースであったのか知りたい」という気持ちを持ったままテレビを見ながら続報を待ちましたが、なかなか出てきません。そしてようやくニュースの時間となり、遠くソ連で当時のゴルバチョフ大統領がクリミアの別荘で軟禁され、保守派によるクーデター(いわゆる「ソ連8月クーデター」)が発生したことを知ったのです。

参照：<http://goo.gl/17pd>

これまで当然のことながらロシア(ソ連)といってもあくまで社会の授業で名前を聞く程度の存在でしかなく、特段の関心を持っていませんでした。しかしこの事件がどう進んでいくのか?という点で強い興味を抱き、引き続きテレビで情報をチェックしている自分がそこにいたのです。

戦車の上でのエリツィン演説

この8月クーデターは結果として失敗に終わり、この事件を皮切りに冷戦時代の超大国ソ連は崩壊に向かう事となるのですが、その流れの中で大きな役割を果たしたのが、当時のロシア共和国大統領、そしてソ連崩壊後の初代ロシア大統領となったボリス・エリツィンでした。8月クーデターが語られる際に必ずと言っていいほど使われる有名な写真があります。それはエリツィンがロシア議会ビル(通称 ホワイトハウス)前に配置された戦車に上ってクーデターに反旗を翻す演説を行った様子を写したものです(のちにその画像は日本のカップラーメンのCMにも使われました)。



(attributed to www.kremlin.ru)

この演説の様子は日本のニュースでも流され、私もその様子を見ていました。当然の事ながら、私がエリツィンの話すロシア語は分かるはずもありませんでしたが(もちろん字幕は出ていましたが)、不思議と彼の話すロシア語の持つ力強さのようなものに強い印象を受けたのです。内容は分からないものの、何か惹きつける物を感じたのです。



現在のロシア議会ビル

母の一言

自宅のリビングでテレビを見ながら私がエリツィンの話すロシア語の力強さを母に話した時、母はアイロンがけをしながら「そういえばロシア語を勉強できる高校があるらしいよ」と言ったのです。当時の私は中学3年生。高校受験を控えた時期であり、自分の進路を考える時期でもありました。進路について特に明確な方向性があったわけではなかった自分にとって(経済的な面からも県立高校に行ってほしいという母親からの希望もあり、県立高校普通科の高校受験を決めていたこともあります…)、ロシア語を学ぶという選択肢が生まれた瞬間でした。今になって思えばなぜ母親がロシア語を学ぶことができる高校があっ

たことを知っていたのかは知る由もありませんが、その言葉が無ければ私がロシア語を学ぶきっかけもなく、今とは全く違った人生を歩んでいたことでしょう。

大学でのロシア語学習

高校受験ではロシア語コースを持つ都内の私立高校に合格したものの、第一志望である県立高校普通科に合格、進学したこともあり、高校時代はロシアとは無縁の生活でしたが、大学受験を考える段となり、再びロシア語の学習という選択肢を中心に選ぶ事となりました。国立・私立と複数受験したものの不合格の連続、浪人生活を覚悟しましたが、最後の最後、国立後期日程で第一志望であった東京外国語大学 ロシア・東欧課程 ロシア語専攻に合格することができました。結局受験した私立大学はすべて不合格、これが唯一の合格通知でした。なんとも幸運でした…。

大学での4年間は当然ロシア語の学習が中心となります。大まかにいって、最初の2年間は語学の基礎、後半の2年間は①語学②文化③政治・経済という3分野から自分の関心ある分野に関するコースに進むというカリキュラムでした。私は③の政治・経済コースを選択しました。特に最初の2年間は基礎固めということもあり、ロシア語の単位で1個でも不可があれば留年という非常に厳しいものでした。

ロシア語は日本人にとっては非常に難しい言語のようで基礎的レベルの習得までにヨーロッパ系言語の約2倍の学習時間が推奨されているようです。

(参考：http://www.dila.co.jp/business/learning_time.html)

私も当然ゼロからのスタートでしたので、英語と全く違うキリル文字を覚えるところから始めました。まだ単語は全く分からないものの、アルファベットが読めるようになっただけでずいぶん心理的なハードルが下がったように感じられました。今のようにインターネット環境も身近ではなかった時代(大学に入学したのはWindows95が発売された1995年。以降急速にPC・インターネットが発達する時期でした)、ネイティブの発音も学校の先生またはNHKの海外ニュース映像がせいぜいという感じでしたので、ひたすら辞書と教科書を使っての勉強でした。その点では今はインターネットがあれば日本にいながらネイティブの情報を簡単に得ることができるのは羨ましい限りです。

大学では幸い留年することもなく無事4年間で卒業となりました(ロシアへ語学留学をする人もいましたが、私にはそのような経済的余裕はありませんでした)。とはいえ、やはり実戦経験(ネイティブとの会話)に乏しいのは歴然で、たった一度だけでしたが友人と3泊4日で行った極東ハバロフスクへの旅行では、ホテルのチェックインでフロントスタッフの話

すロシア語に全くついていけず、かつ自分の言いたいこともうまく言えずに大きなショックを受け、落ち込んでしまったものです。語学というものはやはり実践が重要ということを感じた出来事でした。

そして就職

私が就職活動をしたのは1998年(1999年4月入社分)。この年はアジア通貨危機・ロシア危機と世界的な経済危機が起こる中、日本も不況の波に飲み込まれ、いわゆる「就職氷河期」となっていました。幸い私はロシア語という専門性のおかげで水産メーカーから早期に内々定を頂く事ができ、就職浪人はなんとか避けられるという状況の中、自分が学んだロシア語を生かせる分野ということで、マスコミ・総合商社・自動車メーカーをターゲットに就職活動を行い、最終的にご縁あって丸紅株式会社から採用通知を頂く事ができ、1999年4月に入社しました。その後1か月の新入社員研修を経て、ゴールデンウィーク連休明けに現在も所属する化学品部門(営業部門)への配属となりました。化学品部門はロシアとのビジネスがあるということで自身が志望した部門の一つでした。入社以来丸15年、そして間もなく16年目が終わろうとしています。

当時入社した同期は80名、うち化学品部門に配属された同期は5名でした。部門の中にも営業、管理いろいろな組織が存在する中、私が配属されたのは部門の中の経理の仕事でした。「営業部門所属でも経理?」、「ロシアとは関係ないのでは?」というツッコミがありそうですが、商社というのはいろいろな組織の集合体です。この辺りも含めて商社の仕事や今のロシアでの私の仕事について次回触れてみたいと思います。

(つづく)